

期日 七月二十七日午前八時半より正午まで
会場 神戸市国際会館

一、分科会報告書

時間の関係で分科会報告は分科会の速記や司会者助言者らの第一日目の要約原稿により、五十六頁の報告書を夜半に編集、印刷四千部にして第二日目の会場入口で配布しそれをもって報告会の代償とした。

二、全体会議

この全体会議には例年行なっている私幼に二十年以上の勤務教職員を表彰することになっているが本年も六十八名の先生方が表彰を受け、ますます私幼教育に専念する決意を固められた。山下俊郎氏から分科会の助言者としての感想があり、引き続き日私幼が昨年

以来実に一年半をかけて企画した日私幼映画の完成前の試写会をして、批評を仰いだ。

題名「幼稚園教育」：幼児の社会性六巻

製作は岩波映画社に依頼し、本年四月東京の或る幼稚園を選定し、本年の入園児(二年保育年少)と一学期間取り組んで四ヶ月間、やつと撮影が終ったばかりの物である。九月末には完成されて、一般社会にデヴューする予定であるが、この映画の持つ意味はおとに幼児を正しく認識していただくことであるが、幼児が集団に入っていく姿がなまなまと記録されており、保育者としてもいろいろ今更のように考えさせられる内容をいくつか持っているという感想が発表された。

正午全体会議を終了して市内観光にうつつ

今年の国公立幼稚園の 園長会と研究会について

伊 東 金 造

この八月、阿波の鳴門と長崎の島平戸で暑さにもめげず全国国公立幼稚園長会主催の「幼稚園教育研究協議会」と「園長会総会並

に研究大会」が開催された。以下それらの状況と感想一、二を述べてみることにする。

まず幼稚園教育研究協議会鳴門大会につい

た。

結語

以上で成果という題名からは少しそれた感があるが、前にも述べた通りこの一回の大会は今後開かれる地区研修、都道府県研修とつながりがあり、更に来年度というふうに真に空間的には全国的の私幼の研修であり、時間的には果てしなく続くという意味合いでの有意義ばかりでなく、年に一回同じ職にあるものが一堂に会して話しあうという親近感を味うこと、また司会者助言者意見発表者など全国的にその適材を数多く名のりをあげさせるよい機会であり、日私幼外部の講師団の方々にもますます私幼への理解を深めていただくという副次的成果なども考えられ、来年度からは分科会を二日の計画に既に内定している。

ただ本年は第一日の夜「幼児の母親へおくる夕」の特別講演会を宿泊地などの都合で開催出来なかったことを遺憾に思っている。

(日私幼理事長)

* * * * *

てであるが、八月十四、五の両日鳴門市の林崎小学校、精華幼稚園を会場として行なわれた。ちょうど月おくれの盆とぶつかり乗物の

苦勞で参会者数も心配されたが、乗りものも暑さも何のその、北は北海道から鹿兒島、対島まで、六百人の予定が千人を超える嬉しい悲鳴をあげる盛会さであった。

会の内容は開会式について五人の研究発表十二の分科会での研究協議、講演・見学などであった。

まず大会を通じて第一に感じたことは「幼稚園の先生方は研究熱心だ」ということである。地元の大会委員長井藤利邦園長が「熱心な先生方がこの地にたくさん集まったので、この二日間は特に暑かった」とあいさつされたが、鳴門では例外の暑さであったそうだ。

その暑さをものともせずそこそ終始全員が席をあげず発表し、傾聴した。よく大会二日目はがらあきの例もあるが、幼稚園の先生は最後まで頑張っていた。こうした状況は地域の幼稚園研究会でも見られるがその研究意欲は頼もしい限りである。

次に研究発表では「苦勞した尊い経験」が発表され、幼稚園とか地域の先生方の「共同研究」が多く、「調査や統計を活用したしっかりしたもの」という感じを受けた。五人の発表とは、広島の高間先生の「幼児の環境と性格の形成」、東京の高間先生の「地域に即した体育的遊びと遊具の工夫」、和歌山の中川

先生の「科学性の芽生えはどのようにして育てられたか」、大分の田中先生の「孤立した幼児の社会性をどのように育てるか」、愛知の田口先生の「本園の行事の取扱い」である。なお発表の方法態度についても堂々たるもので、調査や統計資料、スライド、テープなどを準備され、短い時間に最も効果を挙げる工夫がなされていた。ただ反省されることは会場によっては夏の暑い会場ではスライドは？ 地域の遠く離れたところでのテープの効果は？ などが一考を要すると、やって見えて感じられる。

さて十二の分科会の研究協議についてであるが、その第一は分科会の類である。はじめ十二の分科会は多すぎないかと思つたが決してそうではなかった。幼稚園の先生方が自分たちの会として自由に話し合うためには参加者は少ない程よい。それでも一分科会百人を越すところもあつたがどうしても聞き手が多くなる。

第二に感じたことは幼稚園の先生方の研究主題に対する関心の傾向である。各分科会の参加者の傾向から見て、日々の直接指導に関係の深い保育の内容や方法技術等に関心が高いようである。これは文部省で指導書が次々と発行された影響もあるかもしれないが六領

域関係の分科会参加が多かった。「教師の研究のあり方」「幼児の理解のし方」などは比較的少なかった。然し逆にこうした分科会は園長の参加が多かったのもほほえましい風景と感じた。もっともこれだけで関心の度合はわからない。話し合いがしやすいから直接経験が多いから―などもあるかもしれない。

第三は研究協議の状況についてであるが、司会者、指導者が用意されていたが、参会者の先生方の日頃の経験、研究した知識を通して活発な発表や討議が多かつたことを感ずる。とかく今まで幼稚園の先生方は聞き手が多かつたが、積極的に発言し思考する傾向は頼もしい。そしてつましい真剣な話し合いの中に「今後の幼稚園教育の在り方」や「教育要領改訂に望むもの」などが具体的に語られているように感じられた。

この大会についても一つはレクリエーションの「阿波おどり」と「人形じょうり」についてである。井藤園長が「あまり金をかけないでこの地独特のものを十分味わってもらふ」趣旨のサービスであつたが、大会に全くよい効果を与えていた。有名な阿波おどり行事を旬日に控えての「幼稚園の先生と市職員のおはやしとおどり」、城北高校生の名人芸の「じょうり」と人形練り」は一同しゅんと

したり、沸き立ったり、暑い二日間もこうした心遣いがあったればこそ最後まで研究も張りきれたのかも知れない。

さて園長会の総会並に研究大会に移ろう。

同じ八月の十九、二十日と長崎県の離れ島、歴史ゆかしい平戸市で、平戸幼稚園・小学校を会場として行なわれた。出席者は全国各地から代表二百八十名が集まり、総会では本年度の組織、運営の基礎を固め、研究発表講演と全体協議があり、園長会の活動の在り方、今後の問題点などが討議され、大会宣言決議で終った。

この平戸大会を通じての第一の感想は「今や日本の幼稚園教育は第二の飛躍期にさしかかっている」との何とはなしの印象である。

八十余年の歴史を持つ日本の幼稚園教育が、昭和二十九年頃から戦後第一期の飛躍期を持ち、「幼稚園教育要領」「幼稚園設置基準」の相次ぐ制定、幼稚園の増設就園児の増加を見たが、形は異っても第二期の上り坂の予感がある。日本の幼稚園教育の実情からこのままではすまされないという感を強く受けた。

園長の研究発表については「兼任園長も真剣に幼稚園教育について取り組むようになった」との感を深くした。従来はとかく兼任園長は主任任せて「私は幼稚園のことはよくわ

からないが……」でも済まされた、——恥ずかしいことであるが。そして発表も理論が多かった。ところが今度の発表は幼稚園経営についての貴重な経験の発表が多かった。その発表とは、東京・斎藤園長の「成長発達契機をとらえた指導計画の作成」、静岡・関塚園長の「私の幼稚園経営」、神戸・熊沢園長の「神戸市立幼稚園の健康手帳」、別府・塩手園長の「幼稚園給食十年の歩み」である。

全体協議については次の三議題であった。1. 幼稚園教育の拡充強化に関する方策。2. 教職員の待遇改善に関する方策。3. 幼稚園給食の促進の方策。

この全体協議の内容にふれるとおもしろいのがごく簡単に私の感想だけにする。

①の問題は基本的な問題で、施設の増強、教員養成、施設費の大巾増額、幼児の完全就園を目標などを含む。イギリスでは五才児は義務制だとときく。幼児の教育は国が本腰を入れて措置すべきである。それには就園率が高まらねばならぬ。高めるには関係者(文部省を含む)が努力せねばならぬ。幼稚園教育は決して特殊な子ども、一部のこどもの教育ではない。この辺にこの問題のポイントがあると思う。幼稚園教育の拡充強化は普及と徹底を含み、設置基準とも関連する困難な内

容を持つ。保育園、公私立幼稚園一体として難かしい二本立、即ち幼児の就園率向上と教育の充実を解決せねばならない。国が本腰を入れ、また入れなければならぬようにと強く感ずる。

②の教職員の待遇改善の問題はわれわれの多年の宿願であり、幼稚園教育の拡充強化とも関連する基本問題である。何年かかってでも解決せねばならぬものである。今年の大会で感じられることは、区市町村教育委員会の理解で、部分的にはあるが、改善向上しつづけることである。私たちは小学校教員なみを強く要求しているが、ある地域では高等学校並になつていくところもある。しかし根本は国費補助までいかなくは解決されないと思う。

③の給食については「まず粉乳をしっかり与えて」「次に小麦粉を」ということである。講演上野芳太郎氏の「欧米教育をみて」と藤浦洗氏(平戸出身者)の「私の秘密について」は暑さを忘れて聞いた。

最後に山鹿素行末孫市長さんを先頭に伊藤住子園長外、地元の御協力を参会者は様に深く感謝していたことを記しておわる。

(全国公立幼稚園長会長)